

「上野三碑」の価値について

「上野三碑」

飛鳥時代末期から奈良時代初期にかけて、高崎市南部に建てられた山上碑（やまのうえひ）・多胡碑（たごひ）・金井沢碑（かないざわひ）の総称。日本国内に現存する古代（7～11世紀）の石碑は18例しかなく、その内の3例が近接して残っていることが特筆される。三碑はいずれも文化財保護法により、国の特別史跡に指定（山上碑は「山上碑及び古墳」の名称）されて保存が図られている。

石碑の建立は渡来文化の一つであり、その伝播と受容の背景には古墳時代以来の東アジアとの交流によって築かれた、多民族が共生する社会の存在があった。上野三碑はそうした友誼の大切さを示すかけがえのない記憶遺産として、また1300年余の間それを守り伝えてきた人々の叡智の語り部として、広く世界に知られるべき価値をもっている。

山上碑（681年）

完全な形で残るものとしては、日本で最古の石碑である。

放光寺の僧の長利（ながとし）が亡き母への想いを込めて、その墓である山上古墳の傍らに建立した。放光寺は、寺の名が記された瓦が出土したことから、史跡山王廃寺（前橋市総社町）であるのが明らかになった。

碑文は日本語の言葉の順に漢字を並べる方法で書かれており、漢字文化の和風化を示すことで高い学術的価値を有している。自然石を使った形は、新羅（しらぎ）の南山新城碑（なんざんしんじょうひ・591年）などに似ている。



山上碑

多胡碑（711年頃）

栃木県的那須国造碑（なすのくにのみやつこひ・700年）、宮城県が多賀城碑（たがじょうひ・762年）と合わせて「日本三古碑」と称される。

片岡（かたおか）・緑野（みどの）・甘良（かんら）の三つの郡にある300戸を合わせて、新たに多胡郡が誕生した経緯を永く伝えるために建立された。

碑に刻まれた文字は古代の楷書の好例として、18世紀には朝鮮通信使を通じて清国にも紹介され、現在に至るまで書を通じた文化交流に貢献していることでも国際的な価値を有している。笠石をのせる整った形は、新羅の真興王（しんこうおう）が建立した磨雲嶺碑（まうんれいひ・568年）などに似ている。



多胡碑

金井沢碑（726年）

地域社会での仏教の広がり、家族の中での女性の地位、東国における政治の実情を伝える石文（いしぶみ）である。

建立者である三家子口（一字不明）は、「群馬郡下賛（しもさの）郷」を居所とすると書かれていることから、山上碑の長利と同じく佐野屯倉（みやけ）を管理した人物の子孫とみることができる。石碑建立が継承されたことを示す日本最古の例であり、渡来文化の受容のあり方を知る上で重要な価値を有している。また「群馬」の文字が使われた県内最古の例としても注目される。



金井沢碑